The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

謝道韞の「擬嵇中散詠松詩」について

鈴木敏雄

晋の女性詩人謝道韞（名は韜、生没年未詳、四世紀後半に在世）に、「擬嵇中散詠松詩」[1]と題する擬作詩が一首ある。

遙望山上松　　遙かに望む山上の松
隆冬不能凋　　隆冬も凋む能はず
願想遊下憩　　願はくは下に遊びて憩ふを想ひ
瞻彼萬仞條　　彼の万仞の条を瞻る
騰躍未能升　　騰躍するも未だ升る能はず
頓足俟王喬　　足を頓らして王喬を俟つ
時哉不我與　　時なるかな我に与せず
大運所飄颻　　大運に飄颻せらるる

（『藝文類聚』巻八十八、『詩紀』巻四十七）

この擬作詩の原詩は、詩題に拠れば魏の中散大夫嵇康（二二三―二六三）の「詠松詩」であるが、現存の『嵇康集』に「詠松詩」と題する詩は無い。では原詩は現存しないのかと言えば、実は嵇康の「遊仙詩」、

遙望山上松　　遙かに望む山上の松
隆冬鬱青葱[2]　　隆冬も鬱として青葱たり
自遇一何高　　自ら遇すること一に何ぞ高き
獨立邊無叢　　独り立ちて辺りに叢無し
願想遊其下　　願はくは其の下に遊ぶを想はんも
蹊路絶不通　　蹊路絶えて通ぜず
王喬弃我去　　王喬我を弃げて去り
乘雲駕六龍　　雲に乗じて六龍に駕す
飄颻戲玄圃　　飄颻として玄圃に戯れ
黄老路相逢　　黄老と路に相逢ふ
授我自然道　　我に授く自然の道
曠若發童蒙　　曠として童蒙を発くがごとし
採藥鍾山隅　　薬を採る鍾山の隅
服食改姿容　　服食すれば姿容を改む
蟬蛻棄穢累　　蟬蛻して穢累を棄て
結友家板桐　　友と結びて板桐に家す

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

臨觴奏九韶　　觴に臨んで九韶を奏づれば
雅歌何邕邕　　雅歌何ぞ邕邕たる
長與俗人別　　長く俗人と別るれば
誰能睹其踪　　誰か能く其の踪を睹んや

（『嵇康集』巻一、『詩紀』巻十八）

がそれではないかと考えられる。ただし一見してすぐにそれと認められるように、この「遊仙詩」の前半八句のみを模倣し、後半への模倣はしていないようである。

ところで、この「遊仙詩」を原詩と見做す場合、[3] 一つの疑問が生ずる。すなわち、謝道韞はなぜ嵇康の「遊仙詩」に擬作しておきながら、半前のみを模倣するに止め、後半を中断して「詠松詩」としたのか、という疑問である。

一体この「擬――（詩）」型の擬作は、本来、擬作者の意図に従って原詩を二句一聯ごとに言い換えることで成立する詩体で、原詩の詩句の模倣に甘んじられない表現を擬作者が欲する場合は、原詩と対峙する意識を持って擬作することもある。つまり、原詩に類似した形式を採りつつ、原詩に擬作詩を対比させ、擬作者に個有の思想感情を逆に顕在化させる効果を荷っている。従って、謝道韞が原詩の後半に模倣しなかったのには、他ならぬ彼女自身の背景、延いては境涯が大きく関わっていると考えられる。そこで以下に彼女の伝記とこの擬作詩、および他の作品との関係を見ながら、擬作意図を明らかにしてみたい。擬作詩の形式上の問題としても、興味がもたれるところである。

謝道韞については、多くの女性作家がそうであるように、史料があまり残されていない。作品としては、詩に右掲の擬作詩以外に、「泰山吟」（『詩紀』は「登山」に作る）一首があり、文章も「論語賛」を一篇残すのみである。元来多作の方ではないらしく、『隋書』経籍志には「晋江州刺史王凝之妻謝道韞集二巻」とあり、大半が散佚してしまったことが知られる。その他、伝記的史料としては『世説新語』に四条（言語篇71、賢媛篇26・28・30）の挿話（エピソード）が伝えられ、『晋書』巻九十六列傳第六十六「列女傳」には『世説』などに基づいて組み立てられたと思われる正伝（王凝之の妻謝氏伝）が、辛うじて伝えられている。以下、この『晋書』謝道韞伝に基づいて彼女の境涯を概観し、さきに提示した問題を考察してみたい。

『晋書』謝道韞伝には、次のようにある。

【1】王凝之妻謝氏、字道韞、安西将軍奕之女也。【2】聰識有才辯、叔父安嘗問、「毛詩何句最佳。」道韞稱、「吉甫作頌、穆如清風。仲山甫永懐、以慰其心。」安謂有雅人深致。【3】又嘗内集、俄而雪驟下。安曰、「何所似也。」安兄子朗曰、「散鹽空中差可擬。」道韞曰、「未若柳絮因風起。」安大悦。

【4】初適凝之、還、甚不樂。安曰、「王郎、逸少

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

子、不惡。汝何恨也。」答曰、「一門叔父則有阿大・中郎、羣從兄弟復有封・胡・羯・末。不意天壤之中乃有王郎。」封謂謝韶、胡謂謝朗、羯謂謝玄、末謂謝川。皆其小字也。【5】又嘗譏玄學植不進曰、「爲塵務經心、爲天分有限邪。」【6】凝之弟獻之嘗與賓客談議、詞理將屈。道韞遣婢白獻之曰、「欲為小郎解圍。」乃施青綾步鄣自蔽、申獻之前議、客不能屈。

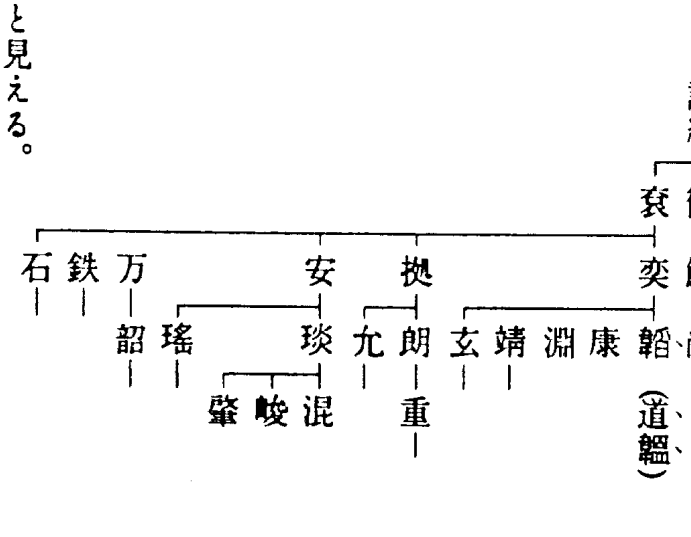
【7】及遭孫恩之難、舉厝自若。既聞夫及諸子已爲賊所害、方命婢肩輿抽刃出門、亂兵稍至、手殺數人、乃被虜。其外孫劉濤時年數歲、賊又欲害之。道韞曰、「事在王門、何關他賊。必其如此、寧先見殺。」恩雖毒虐、爲之改容、乃不害濤。【8】自爾嫠居會稽、家中莫不嚴肅。【9】太守劉柳聞其名、請與談議。道韞素知柳名、亦不自阻、乃簪髻素褥坐於帳中、柳東脩整帶造於別榻。道韞風韵高邁、敍致清雅、先及家事、慷慨流漣、徐酬問旨、詞理無滯。柳退而歎曰、「實頃所未見。瞻察言氣、使人心形俱服。」道韞亦云、「親從凋亡、始遇此士。聽其所問、殊開人胸府。」

【10】初、同郡張玄妹亦有才質、適於顧氏。玄每稱之、以敵道韞。有濟尼者、游於二家。或問之、濟尼答曰、「王夫人神情散朗、故有林下風氣。顧家婦清心玉映、自是閨房之秀。」【11】道韞所著詩賦誄頌、並傳於世。

この正伝は簡単な挿話の連綴より成っているので、挿話ごとに順に見てゆくことにする。

【1】王凝之の妻謝氏、字は道韞は、安西将軍謝奕の女なり。

謝道韞は謝家一族の大御所である謝安（三二〇——三八五）の兄謝奕の娘で、王羲之の次男王凝之の妻となっている。第何女かは分からないが、謝霊運の祖父謝玄の姉であることは確かである。謝家の簡単な世系図を示せば、



と見える。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

【2】聰識にして才辯有り。叔父の安嘗て「『毛詩』は何の句か最も佳き」と問へば、道韞「吉甫頌を作り、穆たること清風のごとし。仲山甫永く懷ひ、以つて其の心を慰む」と称ふ。安謂へらく雅人の深致有りと。

少い頃から文学的感覚に特に優れていた謝道韞の才媛ぶりが紹介される。恐らく謝家の家学の一場面であろう、謝安との対話の中で道韞は『毛詩』大雅・烝民の詩句の佳さを指摘した。この挿話は彼女の思想形成の過程を知る上で看過できない。話題になったのは、「天生烝民、有物有則。民之秉彝、好是懿德」（天の烝くの民を生むや、物有れば則有り。民の彝を秉るや、是れ、懿しき徳を好む）で始まる章の末句で、この章の冒頭部分を見て孔子も「この詩を為る者は、其れ道を知るか」と称えたと『孟子』告子篇にある章句である。称讃理由は、衆庶には生まれながらにして徳を好む天性が備っていることを冒頭の四句が主張する点にある。その後の展開も、天は天子を保んずるために賢臣仲山甫を生み、仲山甫は天子の徳政を広めに出向く、その仲山甫を頌え、かつ慰めるために尹吉甫が穆らぐこと清風のごとき内容の詩を作った、と続く。一篇、天下を支える賢徳を称えた大雅の作者の趣旨をよく汲むとされ、謝道韞は少くしてそれを理解していたことになる。道韞は当時の一般的風潮下に在って道家の思想を持つが、後述する「論語賛」に明言されるように、儒家の思想も併せ持つ。早くから儒道両教の素養を身につけていたことが、この挿話から明らかになる。

【3】又た嘗て内に集ふに、俄かにして雪驟かに下る。安曰はく、「何の似たる所か」と。安の兄の子朗曰はく、「塩を空中に散ずれば差や擬するべし」と。道韞曰はく、「未だ柳絮の風に因つて起こるに若かず」と。安大いに悦ぶ。

『世説』言語篇71にはこの記載の基になる挿話が見え、謝安が「兒女と文義を講論」していた時に雪が降り、「白雪紛紛何所似」と訊いたとある。七言で韻を踏まえて応じるとともに、謝朗が雪を「塩」に喩えたのに対し、道韞は「柳絮」に喩えたというのは、彼女の自然を捉える感覚の新鮮さ、物状の形容の適確さが（男性以上に）優れていることを明らかにしており、謝安もその才を買ったものと思われる。「雪」を「柳絮」に喩えた例は、彼女以前に見出せない。[4]

【4】初め凝之に適ぎ、還り、甚だ楽しまず。安曰はく、「王郎は逸少の子、悪しからず。汝何をか恨むや」と。答へて曰はく、「一門の叔父には則ち阿大、中郎有り、群従兄弟には復た封、胡、羯、末有り。意はざりき天壌の中に乃ち王朗有りとは」と。封は謝韶を謂ひ、胡

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

は謝朗を謂ひ、羯は謝玄を謂ひ、末は謝川〈淵〉を謂ふ。皆其の小字なり。

『世説』賢媛篇26にもここの基になる挿話が載せられ、道韞が夫の王凝之を非薄していたことが明かされる。後述するように、王凝之は道教の一宗派である五斗米道を篤信し、却ってその徒の孫恩に害される。そのような後果を齎す凝之の資質を見抜き、その生涯を預見していたかの発言を道韞はしたかに思える。凝之のいかなる材を非薄していたのかは具体的に述べられない。恐らく、次の謝玄に関する記載にも見られるように、道韞は「塵務心を経」ということを嫌っているので、或はその辺りに理由があるのかも知れない。『世説』および『晋書』の記載に拠れば、確かに道韞が指摘するように、謝家では謝安を始め、拠、朗、玄らには逸話が多いが、凝之は孫恩の起義の際、その攻撃に備えず、祈りて済ませて害されたという醜聞が伝わるのみである。凡そ王羲之の七人の子のうちで令名の知られるのは末子の献之くらいで、族子の多くが「令からず」であったという（『世説』軽詆篇）。道韞が王氏との結婚を、自らに賦与された境涯の中で好ましくない事態の一つであると受け取っていたことは、想像に難くない。後述するような、天運に対して彼女の不満が生ずる原因の一端がここに窺える。道韞は、当時一流の玄談家として名があり、「高世の志有り」（『世説』言語篇70）と目された謝安に認められ、可愛がられ、教育を受けている。代々五斗米道を信奉する王家の宗教的な在り方と、謝家の哲学的な家学の影響下にある道韞の在り方に、齟齬があったかに思われるところである。

【5】又た嘗て玄の学植の進まざるを譏りて曰はく、「塵務の心を経と為すか、天分に限り有りと為すか」と。

謝玄（三四三――三八八）は「天分有限」のはずはないから、ここは「塵務」で心を汚されることを厭うての発言であろう。天分を有し、学植を積み、徳の修養に努めることを第一義とする道韞の姿勢が彷彿とする。

【6】凝之の弟の献之嘗て賓客と談議し、詞理将に屈せんとす。道韞婢をして献之に白さしめて曰はく、「小郎の為に囲ひを解かんと欲す」と。乃ち青綾の步鄣を施して自ら蔽ひ、献之の前議を申ぶれば、客屈する能はず。

王献之は王羲之の七子の中で唯一人優れていたことは既述した。『晋書』に「少くして盛名有り、而して高邁不羈、閑居すること終日と雖も、容止怠らず、風流一時の冠と為す」と称され、謝安も「佳し」として甚だ愛している。口数は多くなかったらしいが、謝安ほか時人とのやりとりを見る限りでは「詞理」に劣るとは思えない。その献之と義

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

を談じて屈してしまう相手といえばかなりの論客であろうが、道韞はそのような相手すらも躱せる程の「詞理」の持ち主であったと言える。道韞の談義については、後述するように、「老子」の談義に秀でたとされる劉柳（叔恵、？――四一六）をも感服させるほどの力が有ったことが知られる。

因みに、「青綾步障」は清談の習慣として俗塵を遮断する意味を持つものではないか。

【7】孫恩の難に遭ふに及び、挙厝自若たり。既に夫及び諸子の已に賊の害する所と為るを聞き、方に婢に肩輿を命じ刃を抽きて門を出づ。乱兵稍や至れば、手づから数人を殺し、乃ち虜へらる。其の外孫の劉濤時に年数歳、賊又た之を害せんと欲す。道韞曰はく、「事は王門に在り、何ぞ他族に関はらんや。必ず其れ此のごとくんば、寧ろ先づ殺されん」と。恩毒虐たりと雖も、之が為に容を改め、乃ち濤を害せず。

列女伝に採り上げられるにふさわしい、道韞の男勝りの風格を伝えると同時に、「毒虐」と評される孫恩に「容を改め」させるほどの仁勇の持ち主であることも窺える。孫恩の起義は彼女の生涯で最大の惨事であることは言うまでもなく、残存する作品はすべてこの事件の陰影を帯びているかに思える。以下それを、初めに提示した擬作詩の問題と関連付けて述べたいが、その前に謝道韞が孫恩に向って言った「事は王門に在り」という発言について、一言しておきたい。

そもそも、士族出身で五斗米道の教主である孫恩が起義を発して会稽内史の王凝之らを殺害したのは、東晋政権および南下した士族らによる江蘇一帯の民衆に対する賦税、徭役、兵役などの加重負担、延いては搾取に反撥した結果である。そしてその際、当時民衆の拠り所となっていた五斗米道（天師道）の宗教的な組織力を支えとして事を起こしている。会稽内史であった王羲之ひとりが起義の対象とされたのでなく、凡そ江南に在った県令、太守、士族は尽くその対象とされ、呉興太守であった謝邈、永嘉太守であった謝逸をはじめ、多くが同時に害に遭っている。当初の彼らの事態認識の甘さは、王凝之について見れば、『晋書』王凝之伝に、

……凝之亦工草隷。仕歴江州刺史、左將軍、會稽内史。王氏世事張氏五斗米道、凝之彌篤。孫恩之攻會稽、僚佐請爲之備、凝之不從、方入靖室請禱、出語諸將佐曰、「吾已請大道、許鬼兵相助。賊自破矣。」既不設備、遂爲孫恩所害。（……凝之も亦た草・隷に工みなり。仕へて江州刺史、左将軍、会稽内史を歴。王氏世々張氏の五斗米道に事へ、凝之弥いよ篤し。孫恩の会稽を攻むるや、僚佐之れが為に備へんことを請ふも、凝之従

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

はず、方に靖室に入りて請禱し、出でて諸将佐に語りて曰はく、「吾れ已に大道に請ひて、鬼兵の相助くるを許さる。賊自ら破れり。」と。既に備を設けず、遂に孫恩の害する所と為る。）

とあるなどに窺える。五斗米道は庶民のみでなく士族にも受け入れられ、その組織力は政治にも利用されていた。しかし、王氏が代々五斗米道の信徒であったからといって、事態は士と民の対立構造を超越してまで宗教上の連帯が功を奏することは無かった。王凝之はそこを見抜けなかったようである。

また、王凝之には「劾范甯表」がある。『穀梁伝』に集解をつけた人物でもある范甯は、極めて眼識がすぐれ、当時の時局をよく見抜き、孝武帝に時政の在り方と衆庶の賦税、徭役を即刻に改善する旨を進言している。一方で彼は太守として赴任した豫章郡で庠序（学校）を増設し、五経の講読を通して士民の生活向上に助力しようと努めた。ところが王凝之はそれを制度に合わないとの理由で帝に訴え、弾劾した。それぞれに立場の違い、考え方の違いがあり、一概に断言できないが、この場合も王凝之は見識の狭さを問われざるを得ないであろう。やはり范甯に較べ、一内史として時局への認識の甘さを露呈していると言わざるを得ない。従って孫恩の起義に際し、王凝之が採った対処の仕方を見る限りでは、謝道韞が「事は王門に在り」と言った発言裏に、王凝之（及びその背後の政治体制）の不備と責任を問うかの響きを感じとることも可能である。同時に、前述したように人物としての夫を詰るかのようでもあることを、付言しておきたい。

さて、孫恩の起義に際し、「事在王門」という発言に続けて謝道韞が採った言動も、彼女を理解する上で看過できない。謝道韞が、早くから儒家的な素養を身につけていたことは、「吉甫作頌」の詩句に関する插話に於いて既述した。いま、外孫の劉濤の命を救った時、勿論祖母としての情が第一に働いているが、「毒虐」と評された孫恩に手出しをさせなかった言動にも、彼女の仁勇の精神が実践されていると見たい。道韞の「論語賛」には、

衛靈公問陣於孔子。孔子對曰、「俎豆之事則嘗聞之、軍旅之事、未之學也。」

庶則大矣、比德中庸。
斯言之善、莫不歸宗。
驪者乖本、妙極令終。
嗟我懐矣、興言攸同。

孔子曰、「民之於仁也、甚於水火、水火吾見蹈而死者、未見蹈仁而死者矣。」

（衛の霊公陣を孔子に問ふ。孔子対へて曰はく、「俎豆の事は則ち嘗て之を聞くも、軍旅の事は未だ之れを学ばざるなり」と。庶はくは則ち大いならん、徳を中

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

庸に比ぶ。斯の言の善き、宗に帰せざるもの莫し。麤者は本に乖くも、妙極は終はりを令くす。嗟我懐へり、言を興こすの同じくする攸を。孔子曰はく、「民の仁に於けるや、水火よりも甚しきに、水火は吾れ踏みて死する者を見るも、未だ仁を踏みて死する者を見ず」と。）（『藝文類聚』巻五十五）

と言う。軍旅は末事とし、礼を本と考えて、仁を踏もうとする思想が強く窺える。『論語』のこの言葉に加えられた道韞の讃嘆は、軍旅と不仁とによる苛酷な目を見た後にして一層際立つ。孫恩によって夫および実子が害された際、劉氏の外孫を救おうとして「寧先見殺」と言った時、彼女は仁を踏んで死ぬ覚悟があったのではないか。道韞の信条が実践されている場面であると見たい。

謝道韞の境涯は、孫恩による夫および諸子殺害の後、随分と慷慨に満ちたものとなったと察せられる。現存する作品にその折りの心境が反映されている形跡が認められるので、以下、引き続き道韞の正伝に照らし、さらに作品の背景を詳しく見てゆくことにする。

【8】 爾るより会稽に嫠居し、家中厳粛ならざる莫し。

道韞が「擬嵇中散詠松詩」を作ったのは、この時期ではないかと推定する。隆冬も凋むことのない「松」の形象を思慕しつつも近づけず、やがて「大運に飄颻せらる」というのは、正伝に照らして見る限り、この時期以外に考えられない。

原詩の作者嵇康が原詩の「遊仙詩」を作ったのは、その詩句中に見られるように「長く俗人と別る」という心境になった頃、すなわち殺伐とした世相から逃れ、清談と服薬の日々に埋没した魏の正始末から嘉平年間にかけて（嵇康の三十歳代）の頃と推定される。そしてその遊仙幻想は、竹林の遊び及び清談によって老荘哲学の佳境に入ったことを暗示するものと考えられる。嵇康の「遊仙詩」の流れを汲む作品に、晋の何劭（？―三〇一）の「遊仙詩」、

青青陵上松　　青青たり陵上の松
亭亭高山柏　　亭亭たり高山の柏
光色冬夏茂　　光色冬夏に茂り
根柢無彫落　　根柢彫落する無し
吉士懐眞心　　吉士は真心を懐き
悟物思遠託　　悟りし物は遠く託さんことを思ふ
揚志玄雲際　　志を揚ぐ玄雲の際
流目矚巖石　　目を流して岩石を矚る
羨昔王子喬　　羨む昔王子喬の
友道發伊洛　　道を友として伊洛を発ちしを
迢遞陵峻岳　　迢遞として峻岳を陵ぎ
連翩御飛鶴　　連翩として飛鶴を御す
抗跡遺萬里　　跡を抗げて万里を遺つれば

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

豈戀生民樂　豈に生民の楽しみを恋ひんや
長懐慕仙類　長く懐ひて仙類を慕へば
眇然心綿貌　眇然として心は綿貌たり

（『文選』巻二十一、『詩紀』巻二十三）

がある。この詩も「生民の楽しみ」を恋しがらず、「仙類」を慕うもので、嵇康に倣い、類似した心境を詠んだものと考えられる。ただし、何邵自身は嵇康のような境涯にはなかったので、清の何義門が「此詩似爲愍懐太子作」（此の詩は愍懐太子の為に作るに似たり　『義門読書記』文選巻）と言うように、愍懐太子（司馬遹）が賈后、賈謐の陰謀によって嵇康と同じ運命を辿る前に預防線をはり、逃れさせようとして、太子の採るべき道を何邵が代って詠んだ、と解した場合である。

因みに何義門は何邵の「遊仙詩」に関して「遊仙正體」と言い、「宏農其變」と言う。郭璞（宏農）の「遊仙詩」は変体であり、何邵のが正体（せいたい）であると言うのは、詠松（柏）部分、王子喬への言及、遊仙部分という三部構成を採っているからであろう。

ところで謝道韞の擬作詩の場合は、既に指摘してきたように、その遊仙部分を欠く。それはなぜか。以上の正伝の記載から考えられる彼女の境涯に照らして言えば、先づ第一に彼女には嵇康が味わったような竹林の遊び、清談の機会が無かったことが考えられる。謝道韞は早くから哲学的な崇高な境地へ踏み入りたいという思いを懐いていた。当初は謝安を始め、謝家の群従兄弟と学殖を積み、哲学的な境地も高まったと思う。それが王凝之との結婚後、謝家の家学から遠のき、思いを適える機会は乏しくなった。つまり、「遊仙」に繋がる程の境地を、実感していないことになる。第二は、主たる要因と言えるもので、やはり孫恩による夫および諸子の殺害が考えられる。道韞が会稽に蟄居したのは、隠退ではない。悲惨な運命に翻弄され、全てを奪われた結果である。正伝に「厳粛」であったと記載されている点からは、彼女の服喪の心境が窺える。嵇康のように「雲に乗りて六竜に駕す」や「飄颻として玄圃に戯る」ような心境には、暫くの間なれなかったのではないか。

「擬嵇中散詠松詩」で「松」を詠んだのは、謝道韞も、竹林で清談していた頃の嵇康と似た境地に到ることを慕ってであろう。恐らく嵇康の「遊仙詩」の前半は、主として結婚後の道韞の心境を代弁していると思われる。ただし、それは全面的にそうであったのではない。原詩と擬作詩とを比較すると、遊仙部分の有無の違い以外に、詠松部分でも些かの違いが見出せる。他の詩人の「擬――（詩）」型の擬作詩に較べ、謝道韞のは原詩への依存度（模倣度）がかなり高いが、それでも擬作詩に創意が働いている。それは謝道韞に個有の事情に関わって句造りがなされているからである。まず最も注目すべきは、他でもない「松」の形象

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

である。「松」の常緑不変の形象を貞節などになぞらえることは『礼記』をはじめ『論語』や『荘子』などにすでに見られる。例えば『礼記』礼器には、

其在人也、……如松柏之有心。……貫四時而不改柯易葉。……（其の人に在るや、……松柏の心有るがごとし。……四時を貫きて柯を改め葉を易へず。……）

と見える。嵇康も「松」の形象を、「遊仙詩」の三、四句目に見えるように「独立無双」のものとして捉えた。ただ、嵇康が用いた出典は、「遊仙詩」自体の語句に異同も有り、現在のところ詳らかでない。「青葱」、「独立」[7]「無雙」いづれも嵇康の思想感情の典拠を知るには不確定な要素が強い語彙である。従って嵇康の「遊仙詩」の「松」の形象がいかなる思想的な背景を持つのかは暫く措きたい。

では謝道韞の擬作詩はどうか。原詩の「鬱青葱」を「不能凋」で言い換えた点に注目すると、何邵の「遊仙詩」の「光色冬夏茂、根柢無彫落」を意識しつつ、『論語』子罕の、

歳寒然後知松柏之後凋也。

を踏まえ、「松」の形象に儒家的な陰影を帯びさせていることに気付く。『荘子』徳充符および譲王篇にもそれぞれ、

仲尼曰、……受命於地、唯松柏獨也在、冬夏青青。……（仲尼曰はく、……命を地に受くる、唯だ松柏のみ独り在り、冬夏に青々たり。……）

孔子曰、……天寒既至、霜雪既降、吾是以知松柏之茂也。……（孔子曰はく……天寒既に至り、霜雪既に降り、吾れ是を以つて松柏の茂るを知るなり。……）

とあるが、道韞は用いない。用いたとしても孔子の言葉である。つまり、何邵（或いは嵇康も同様か）のように『荘子』を出典として道家的にせず、『論語』を出典とすることを隠さない。

次に、原詩は三、四句目に「松」の独立無双の形象を描き、長く俗人と別れることを言うが、擬作詩の方ではこの二句に擬さない。そして『毛詩』で例えば「邶風」雄雉に「瞻彼日月」と言い、「小雅」正月に「瞻彼中林」と言うなど、期待感を持って恃み仰ぐ思いを表す「瞻彼」[8]という表現を用い、「松」の気高さのみを描く。即ち、世俗と別れようとする思いを、儒家的語彙を使用して抑制し、原詩のようには強く表明しないように思われる。

その他、擬作詩の結句二句も、正体（せいたい）の「遊仙詩」ならばその後に続くはずの遊仙部分を中断させる句造りになっており、原詩の言い換えにはなっていない。そして代わりの「時哉不我與」[9]の句も『論語』陽貨篇の、

日月逝矣、歳不我與。

を出典とする。『論語』のこの語は謀叛者陽貨が孔子に向って仁、知を実現できない時の不利を指摘し、謀叛に誘ったものであるが、唐の李善が「文雖出此、而意微殊。亦不以文害意也」（文は此れより出づと雖も、意は微かに殊な

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

れり。亦た文を以つて意を害せざるなり。『文選』嵇康「幽憤詩」注）と言うように、陽貨がいかなる人物であれ、指摘そのものは当を得ているから、自分の理想実現に時が味方しない恨みを述べたものと解してよいと考える。道韞はそれを踏まえている。

なお、結句「大運所飄颻」の「大運」という語は、皇帝の即位や死去など権力の交替、国家の変動などを言う際に用いられる。そしてそれは本を質せば「五徳（土木金火水）の運」に因るという考え方を含む語である。[10] 暫く、天運を言うものと解しておく。『書経』あたりからの着想による語ではないか。「飄颻」も動揺を表す場合と仙遊を表す場合があり、[11] 嵇康が後者の意で用いたのに対し、道韞は前者の意で用い、原詩と対峙させている。

以上、それほど明確にではないが、謝道韞の「擬嵇中散詠松詩」は、原詩が道家的な考え方から遊仙を指向するのに対し、詩に『論語』などを出典とする儒家的な語を配し、遊仙しようとする意志を極力抑制するかの方向で作っているとも言える。とすれば、その差異は一体、何を意味するのか。

この擬作詩が、謝道韞が会稽に嫠居して間もない頃に作られたものであるとすれば、孫恩による夫および諸子殺害の心の痛手は、まだ癒されてはいないはずである。従って擬作詩にはその悲痛な心境が反映され、「松」の形象には仁人、仁政のある世が表徴され、それが慕われているのではないか。嵇康は遊仙の境地に入れたが、謝道韞はこの時期、それができない。もしくはそうしようとしない。それは、結婚から夫、諸子を失うまでの彼女の運命がそうさせるのであり、他方で、早くから彼女が有していた儒教の素養がそうさせているのだと考える。謝道韞に擬詠松詩はあっても擬遊仙詩がない理由は、以上のように結論付けられるものであると思う。

謝道韞が「擬――（詩）」型の擬作詩の詩体を用い、しかも後半の擬作を中断するという手法を用いたのも、右に述べたような彼女に個有の心境を、より効果的に表出するためであったと思う。[12] 擬作詩のこのような中断の技法は、晋代以降において、数句の増減を行う程度のもの以外は、現在のところ見出せていない。

【9】 太守の劉柳其の名を聞き、与に談議せんことを請ふ。道韞素より柳の名を知れば、亦た自らは阻まず、乃ち簪髻素褥して帳中に坐し、柳は束脩整帯して別榻に造る。道韞風韵高邁、叙致清雅、先づ家事に及んで、慷慨流涕し、徐ろに問旨に酬ひ、詞理滞る無し。柳退きて歎じて曰はく、「実に頃ろ未だ見ざる所にして、瞻察言気は、人の心と形とをして俱つながら服せしむ」と。道韞も亦た云はく、「親凋亡してより、始めて此

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

の士に遇ふ。其の問ふ所を聴けば、殊に人の胸府を開く」と。

ここに登場する劉柳は会稽太守としてである。この人物が、江州刺史となった、字は叔恵のことであれば、この時の道韞との「談議」は、既に少しく触れたように、主として「老子」についてであったろうと考えられる。時の風潮としてその談義が盛んであったことに加え、『晋書』巻六十一列伝第三十一劉柳伝に、

柳字叔恵、亦有名譽。少登清官、歴尚書左右僕射。時右丞傅迪好廣讀書而不解其義。柳唯讀老子而已、迪每輕之。柳云、「卿讀書雖多、而無書解、可謂書簏矣。」時人重其言。出爲徐、兗、江三州刺史。卒、贈右光祿大夫、開府儀同三司。（柳、字は叔恵、亦た名譽有り。少くして清官に登り、尚書左右僕射を歴。時に右丞の傅迪、広く読書するを好むも其の義を解せず、柳唯だ『老子』を読むのみなれば、迪は毎に之を軽んず。柳云はく、「卿の読書は多しと雖も、解する所無く、書簏と謂ふべし」と。時人其の言を重んず。出でて徐、兗、江三州刺史と為る。卒し、右光祿大夫、開府儀同三司を贈らる。）

と見え、劉柳が「老子」の理解に長けていたことが知られる。ここから彼が道韞と義を談ずるにふさわしい人物であることも分かる。この劉柳と遇うまで道韞が「胸府を開く」ことがなかったというのは、嵇康が竹林の遊びや清談で実感したような境地を、久しく体験していないということであろう。「親」すなわちかつて談義し合った玄談家の謝安はじめ謝家の群従兄弟はもはやここには居らず、亡き夫にしても「老子」を信奉してはいたものの、五斗米道という宗教的なそれと、謝安の影響下にあった道韞の哲学的なそれとは、もとより嚙み合ってはいなかった。劉柳にしてはじめて談義が成立したというのも肯ける。この人との出会いは、老いた道韞の心痛を、いくらか癒したに違いない。

謝道韞には「泰山吟」一首が残存する。

峩峩東嶽高　峩々として東嶽高く
秀極沖青天　秀で極つて青天を沖く
巖中間虚宇　巖中に虚宇を間て
寂寞幽以玄　寂寞として幽にして以つて玄なり
非工復非匠　工むに非ず復た匠むに非ず
雲構發自然　雲構発して自ら然り
氣象爾何物　気象爾何物ぞ
遂令我屢遷　遂に我をして屢しば遷らしむ
逝將宅斯宇　逝くゆく将に斯の宇に宅し
可以盡天年　以つて天年を尽くすべし

（『藝文類聚』巻七、『詩紀』巻三十七）

この詩も「気象」の二句が「擬嵇中散詠松詩」の「時哉

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

不我与、大運所飄颻」に同じく運命に翻弄されたことを言うので、或は孫恩の起義後、暫くしてからの作ではないかと推定する。ただ、「擬嵇中散詠松詩」とは、全篇に道家的な語彙を配し、感情の昂りが見られない点、及び結二句では将来への期待が述べられる点で随分趣きを異にする。西晋の陸機にも「太（泰）山吟」があり、

太山一何高　　太山一に何ぞ高き
迢迢造天庭　　迢々として天庭に造る
峻極周已遠　　峻しさ極つて周ねく已に遠く
曾雲鬱冥冥　　曾雲鬱として冥々たり
梁甫亦有館　　梁甫にも亦た館有り
蒿里亦有亭　　蒿里にも亦た亭有り
幽塗延萬鬼　　幽塗は万鬼を延き
神房集百靈　　神房は百霊を集む
長吟太山側　　長吟す太山の側
慷慨激楚聲　　慷慨して楚声を激せん

（『藝文類聚』巻四十二、『詩紀』二十四）

と言う。楽府詩であるから継承性があるが、それでも両者を比較してみると、道韞の作には陸機のように「慷慨」を鬼神にぶつけるような激しさはない。作詩時、運命の翻弄による心痛は幾分癒され、玄談家として「風韵高邁、叙致清雅」と評される道韞の、真面目が発揮されてきた作品であると言えよう。

【10】　初め、同郡の張玄の妹も亦た才質有り。顧氏に適ぐに、玄は毎に之を称するに道韞に敵するを以つてす。

　　済尼なる者有り、二家に游ぶ。或るひと之を問へば、済尼答へて曰はく、「王夫人は神情散朗、故に林下の風気有り。顧家の婦は清心玉のごと映え、自ら是れ閨房の秀なり」と。

謝道韞に「林下の風気有り」というのは、彼女が「散朗」すなわちさっぱりとして大らかであるからで、顧婦人のように女性として高く評価されたのでなく、男女差を超えて評価されている。或は道韞が嵇康、阮籍ら竹林の諸賢を慕い、彼らの作品や逸聞を通して、その気風を捉えていた可能性があることを、この記載は示唆する。

「散朗」という語は、『世説』賢媛篇に道韞を評して言った、この記載の基になる挿話に見える以外に、文学篇97劉孝標注引『続晋陽秋』に袁宏が桓温の父桓彝を評して、

　　風監散朗、或搜或引、身雖可亡、道不可隕。……

と言い、また讒険篇1及び注引『晋紀』に、劉琨が王澄を評して、

　　形甚散朗、内實勁侠。（「侠」を注は「狭」に作る）

と言った、三例が見られる。「勁狭」でなく、人を「搜し引く」ような大らかさを備えることを言うものと考えておく。ただし、「擬嵇中散詠松詩」は林下の賢人嵇康に擬していながら、既に述べた理由により、「散朗」なる風気を

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

感じさせる作品とは言い難いことを付記しておく。

【11】 道韞の著す所の詩、賦、誄、頌、並びに世に伝はる。

『隋書』経籍志に「謝道韞集二巻」とある。もともと多作でない上に残存作品も三篇と僅かであるが、まず道韞の作品は魏・西晋文学を承け、東晋・宋文学の中でいかなる位置に在るのか、また女流文学の観点からはどのような位置付けができるのか、「擬嵇中散詠松詩」の位置付けも併せ、以下に触れておく。

魏から西晋にかけての文学は、「林下」の文学の流れに添って見ると、司馬氏の恐怖政治下に在って、文人達は飲酒や服薬行為によって痴を装い、災禍が身に及ぶ危険を避け、表現も老荘思想に基づく玄言を好んだ。それが東晋から宋にかけて、文学はそこからの離脱をはかり、山水自然へ身を寄せる方向に流れたことは周知の通りである。謝道韞はちょうどその過渡期に位置し、残存する二首の詩すなわち「擬嵇中散詠松詩」、「泰山吟」について見ると、山水詩の新生面を拓くまでは行かないが、特に「泰山吟」の方は玄言山水両面を併せ持つように思う。ただし、彼女が玄言的な表現で隠退を表明するように見せるのは、恐怖政治からの逃避ではないであろう。少なくとも彼女にはそのようにする理由は見出しにくい。ではなぜ玄言の遺風を継ぐのかと言えば、一般的に当時の風潮であろう。謝家、王家いづれの文人も少なからず皆その風潮下に在った。では道韞自身に玄言の遺風を継ぐ積極的な理由はないのかと言えば、時代がなぜそのような風潮を遺すのかと同様、乱世を生きる様々な憂患からの慰藉が考えられる。具体的には、結婚から孫恩起義に至る、自分の手では如何ともし難い「大運」、「気象」による運命の翻弄からの慰藉が、玄言の遺風による表現を欲したものと考える。その際、特に孫恩の起義を政局の在り方に起因するものと捉えたか、王凝之という人物の在り方に起因するものと捉えたかで、もしも後者であるのなら、男性的な表現の中に女性的な心理が働いていると言えよう。「泰山吟」に見られる、山の岩の静かさや雲のうてなの自然な様を玄言の遺風で表現する形は、後の謝霊運らの山水詩の風へ繋がるように思う。

では、女性文学の流れに置くと、どのような位置づけがなされるのか。正伝に顧夫人との人物の比較が見られ、顧夫人が「閨房の秀」と評されたのに対し、道韞は「林下の風気有り」と評され、竹林の諸賢と同様に見られていた。彼女の文学もそれと同じく、男女差を超えているように思う。従ってそれだけで特殊な位置に在ろう。つまり、道韞は残存作品に見る限りでも、夫婦男女間の関係を主として詠む閨房作家ではなかったと推測される。例えば晋代の他の女性作家に孫瓊がおり、彼女の『悼艱賦』には、

伊禀命之不辰　　伊の命を稟くるの辰ならざる
遭天難之靡忱　　天難の忱(まこと)靡きに遭ふ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

と言う。これも天命を歎くが、具体的には異郷に嫁いだ悲運を歎くものであり、いわば女性の立場ならではの詠になっている。それに対して謝道韞の作品は、例えば仮りに「泰山吟」中の「屢遷」に夫との離合を含むとしても、それを直接話題に上せず、男女の情愛の問題に立ち入らない。女性の運命と言うのでなく、人間の運命を「屢遷」させた「気象」を話題にしており、比較的男性的な、むしろ男性文壇に食い込んで退けをとらない作品を指向した作家と言えよう。

以上から、謝道韞の「擬嵇中散詠松詩」も、遊仙、招隠、玄言という老荘文学から、東晋、宋にかけて、山水文学へ移行する過渡的過程に在る（男性）文壇に於いて、「林下の風気有り」と評される道韞の、男性にも退けをとらない教養のもとに作られた一首であると言える。ただしこの一首は、「林下」の嵇康の「風気」に追従するつもりで擬作しながらも、却ってその追従を途中で断ち切り、彼女自身の特殊な事情、即ち孫恩による夫および諸子の殺害という悲運を、嵇康の遊仙に対峙させることで明らかにしようとする。そしてその際、本来の彼女ならば儒道両教の素養を備えつつも道教的な素養のもとに作詩するであろうところを、不仁、軍事の横行を批難する思いを込め、儒教的な考え方を導入して作詩した。そういう意味で、彼女の真面目ではない別の一面が表れた作品であるとも言える。

擬作詩史の上でも、「擬――（詩）」型の擬作詩として、一篇の前半はこの型の原則通り二句一聯ごとの言い換えをする形で擬作しながら、後半はそれを中断し、原詩の「遊仙」部分をカットしてしまう手法を用いる興味深い取り組みを見せる。原詩の句数に対し、擬作詩の方で部分的に句数の増減を行うことはあるが、原詩の内容の主要な部分の半分を断ち切る形で、擬作詩の心情、即ち道韞自身に「遊仙」は有り得ない心境を知らしめようとする手法は、彼女以前に例を見ない。擬作詩が単なる模倣に終らず、あくまで擬作者に個有の思いを伝えるべく機能していることが知られ、擬作詩の一つの体として、その詩史に載せておいていい作品であると考える。

注

① 「嵇中散の詠松詩に擬す」と訓み、「嵇中散に擬し松を詠む詩」とは訓まない。「擬庭中有奇樹詩」（陸機）、「擬沈隠侯夜夜曲」（蕭綱）など、「――詩に擬す」と訓むのが一般的である。

尚お、唐の欧陽詢撰『藝文類聚』（宋本を底本とし、明本に拠って欠を補ったテキストに基づく）は、詩題を「擬嵇中散詩」に作る。本稿は、『藝文類聚』などの類書の欠を更に補って成った、明の馮惟訥撰『古詩紀』の詩題表記

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

に従って考察をすすめる。

また、『藝文類聚』の採録の仕方は、部立てのテーマに不要な部分を省略することがある。謝道韞のこの詩も「松」の部に採られているので、詠松部分のみを載録し、以下を省略した可能性がある。しかしそれなら、『類聚』は原詩の嵇康「遊仙詩」の前半八句も採ってよいと思われる所を採らない点、及び擬作詩の結二句が原詩を模倣せずに収束に向って句が造られている点に鑑み、本稿では一篇八句として扱いたい。ただし別のテキストが存在する場合は、その限りでない。

② 「冬」は各テキスト全て「谷」に作るが、擬作詩から勘案するに、「冬」に作るのが妥当であると考える。その他、「邊一作迴」、「叢一作雙」、「弄一作弃」、「友一作交」、「板一作梧」、「蹤一作蹤」などの異同が見られる。なお「弄」も擬作詩から推すに「升」に作るのではないかと思われるが、例が無いので採らない。

③ テキストに異同が多く、例えば「弄」に作るか「弃」に作るかで詠松部分と遊仙部分の内容的な繋がりに問題が生ずる。本来別の二首であった可能性を否定できないが、何邵がすでにこのテキストを継承していると認められるので、道韞も一首として見たものと考えておく。

④ 蘇東坡が「謝人見和雪夜詩」に、「柳絮才高不道鹽」と詠んだのも、新しい感覚と見做したのではないか。

⑤ 吉川幸次郎「謝安」参照。『世説』言語篇70の插話は、王羲之と謝安の人物像の違いが示され、興味深い。

⑥ 嵇康の事蹟については夏明釗『嵇康集譯注』（黒龍江人民出版社）、莊萬壽『嵇康研究及年譜』（臺灣學生書局印行）を参照した。

⑦ 「青葱」について、『爾雅』釈器に「青謂之葱」とある。「青青」と同義であれば、『荘子』徳充符篇の孔子の言葉「受命於地、唯松柏獨也在、冬夏青青」を踏まえたか。「獨立」は『易』大過に「君子以獨立不懼、遯世無悶」などと見える。

⑧ 嵇康「四言詩十一首」其六にも、「瞻彼秋草」が見える。

⑨ 嵇康の「幽憤詩」にも「時不我與」が見える。

⑩ 「大運」は『史記』天官書に「日月暈適、雲風、此天之客氣。其發見亦有大運。」と見え、『漢書』李尋伝にも「哀帝詔曰、尚書曰、五曰考終命。言大運壹終。」と見える（顔師古の注には「周書洪範五福之數也。言得壽考而終其命也。」と言う）。何晏「景福殿賦」に「許昌者乃大運之攸戾」とあり、『文選』李善注には「春秋説題辞曰、大運在五。雒書摘亡辞曰、五徳之運。」と言う。「五徳之運」は『史記』如淳注に「……五徳各以所勝為行。秦謂周為火徳、……」と言い、姚察注にも「……猶用推五勝之法、以周赤烏為火、……」と言う。

⑪ 曹植「雜詩」の「轉蓬離本根、飄颻隨長風」は動揺のさまを表した例。

⑫ 唐の韋応物の「擬凜凜歳云暮」詩は「古詩十九首」其十六に擬したものだが、原詩の「夢想」部分六句には擬さず、ただ「思將魂夢歡、反側寐不成」とだけ言うに止める。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

「魂夢」が成らない理由を印象付ける効果を期した手法である。

⑬「或搜或引」は桓彝に才士を取る眼識があることを言う。『晋書』桓彝伝に「(彝)性通朗、……有人倫識鑒、拔才取士、或出於無聞、或得之孩抱、……」と見える。

⑭「文心雕龍」明詩篇に「宋初文詠、……莊老告退、而山水方滋。」とある。

⑮『全晋文』列女巻にまとめられている。また譚正璧『中国女性文学史話』参照。

⑯『周易』繫辞・下に「(易之)爲道屢遷」とあり、陰陽の変化に任せるのが易の道であると説く。

NII-Electronic Library Service